

## 佛遺教經の成立に就て

保 坂 玉 泉

佛教の經典は何れも貴重なものであるが眞に有難さを感じる經典としては『佛遺教經』などは恐らく第一位と思はれる。その譯文が平易流暢美辭麗句で加ふるにその内容が道德的教訓的であるからであらう。特に禪家に於ては宋代より『佛祖三經』の一として重要視せられ宗祖道元禪師も入寂前に斯經中の八大人覺を提唱せられた、それが『正法眼藏』最終卷八大人覺である。是れ蓋し宗祖が佛陀の入滅に擬せられ佛陀最後の教誡を末代の正法とせられたからである。

斯かる貴重な教典であるに拘らず古來その成立の經過が甚だ明瞭でない。何れの經典も此點は同様ではあるが、特に佛陀最後の說法とせられ末代の燈明とせられた『佛遺教經』が眞に佛陀臨終涅槃の夕の教なりや否や、眞に佛説なりや否や等の成立に就ての疑問が解決せらるゝことは何人にも望ましいことである。故に之に就て近時渡邊海旭、松本文三郎、境野黃洋等の諸先生が研究考證せられた爲に大體の見當が付いたのは誠に有難いことである。然し尙概觀的でその内容の小細に就ての考證までに至らず従つて成立の經過が明瞭でない。茲に余は二三經典と比較研究の結果

此點一層明瞭になつたので次に之れが報告をして見やうと思ふ。

『佛遺教經』の傳承に就ては何人も感ずるやうに一寸異數のものがある。と云ふのは此經の内容は大體佛陀入滅の記事とその教誨とであるから、多くの佛傳諸經中の涅槃篇の中か若くは涅槃部諸經中の入滅記事の處にそれと同様の内容を持つ箇處が無ければならぬ筈なのに一つもそれが無いからである。佛傳諸經も涅槃部諸經も同様一致の記事を傳ふべきにこれが無いところを観ると此經の内容は本傳以外の異傳別傳でもあるかと思はしめられる。『遺教經』は此點他の經典に比較して甚だ異數と云はねばならぬ。従つて『遺教經』は佛陀最後入滅時の金口直説なりや將た後人の作なりや等の疑が起る。加之散文と韻文の差こそあれ後の馬鳴造の『佛所行讚』の大涅槃品これと同系の『佛本行經』の大滅品と『遺教經』とその内容完く一致する所から先輩諸先生の『佛遺教經』を馬鳴著作とする説、『佛所行讚』より脱化せりとする説、『佛所行讚』大涅槃品は『遺教經』を所依とせりとの説等が唱へられ、兩者の密接な關係と同時に其成立の經過が稍々明かになつた。斯く『遺教經』と『所行讚』とは其成立何れが前後なりや尙未だ不明であるが兩者が接近してゐる以上之を一體と見て、扱て此兩者が如何にして成立したか更に一步進んで點検して見やうと思ふ。

今『遺教經』と藏中自餘の經と比較するに、次の如きことが發見される。『遺教經』は前述の如く涅槃入滅の記事と教誨との二部分より成り、前者を經の形體と觀、後者をその内容と觀てもよいのであるが、その形體たる記事が法顯譯の『大般涅槃經』卷下(以下單に『涅槃經』とあるは此法顯譯を指す)の部分と完く一致するものがある。即ち『遺教經』の七分科で云ふと第一「序分」、第二「修習世間功德分」中の初の部分と後の第五「顯示入證決定分」乃至第

七最後分までの經文が此の『涅槃經』の一部と一致するのである。大體記事の順序が一致するのみならず文言までも同じなのである。試に相似の箇處（大正藏第一卷二〇四頁中以下の文）を摘記するに、

爾時世尊告阿難言。汝今當知。我於道場。成阿耨多羅三藐三菩提。最初說法。度阿若憍陳如等五人。今日在於娑羅林中。臨般涅槃。最後說法。度須跋陀羅。諸天及人。無復更應聞我法而得度。

とあるは『遺教』の序分に全く一致する。次に

爾時如來告阿難言。汝勿見我入般涅槃。便謂正法於此永絕。何以故。我昔爲諸比丘制戒波羅提木叉及餘所說種種妙法。此卽是汝等大師。如我在世。無有異也。

とあるは『遺教』第二「脩習世間功德分」中初「誠邪業」の第一尊戒の條と同文なること知るべきである。『涅槃經』の次下には『遺教』の内容たる第二「脩習世間功德分」と第三「成就出世間大人功德分」とに該當する說法は勿論無く、若干說法の記事はあるが『遺教』の如き豊富な說法内容が無い、大體涅槃の狀況の記事があるがその記事が又『遺教』の後分たる第五「顯示入證決定分」以下と殆んど一致するものがある。

爾時世尊。告諸比丘。汝等今者若有疑難。恣意請問。莫我滅後生悔恨言……今宜速來決所疑也。世尊乃至如是三告。諸比丘等默然無有下求決疑者。爾時阿難卽白佛言。奇哉世尊。如是三誨。而此衆中無有疑者。

とあり。此處では阿難が復命白佛者であるが『遺教經』では阿菟樓駄となつて居る所が稍々異ふのみで他は殆んど相似の文である。然し阿難と阿菟樓駄（阿那律）は佛涅槃枕頭隨侍の代表家で、『涅槃經』の次下に阿難が佛涅槃に已

に入れりや否やの間に對し天限第一の阿菟樓駄が檢證復言し次で列座の諸比丘を慰諭してゐる所は『遺教』の第六分の別未入上上證爲斷疑分と殆ぼ一致するのであるから、多少の相違のあるのは止むを得ぬ。即ち其文を擧ぐれば如左爾時阿菟樓駄語阿難言。世尊已於第四禪地入般涅槃。於是阿難及四部衆。聞阿菟樓駄作此言已。悲號嗚咽。……………共相謂言。世間眼滅。一何速哉。……………爾時衆中。有未得道比丘入天。既見

如來已般涅槃。心生懊惱。宛轉于地。已得道者。深歎世間無常之苦。悲號啼泣不能自勝。是時阿菟樓駄語諸比丘及天人。汝等不應生大憂惱。如來前已爲汝等說諸行性相皆如是。云何猶故而悲泣耶。

尙ほ次下に『遺教』の諸行無常と法身常住との説があると良いのであるが、此處には無く順序は異ふが同様の文句が此の『涅槃經』卷下の少し前にある。即ち、

一切諸行皆悉無常。恩愛合會必歸別離。設我住世。若滿一劫。會亦當滅。我所說法但當憶持誦念勿忘。此則不異我在世也。

この文は須跋陀羅說法直前鳩尸那城諸力士に對する教誨である。故に多少の前後があつても最後の教誨たるに變りが無い。

次に『遺經』の第七分(結分)と同様の文が同じくこの『大般涅槃經』中に

汝等當知。一切諸行。皆悉無常。我今雖是金剛之體。亦復不免無常所遷。生死之中極爲可畏。汝等宜應勤行精進。速求離此生生死火坑。此則是我最後教也。

とあり。『涅槃經』では阿菟樓駄の慰諭が佛入滅後になつて居りそれ以前に佛の説法が終つてゐるから、右の文は兩

經前後相違を免れぬが其文義全然同じのである。

右の小細の比較に依りて『遺教經』と此『大般涅槃經』とは甚だ密接な關係があつたことが分かる。前にも言ふ通り私は遺教經と同型同文の經は佛傳涅槃部にあらざれば涅槃部の何處かに存在しなければならぬとの豫想から常に注意して讀んでゐたのであるが、果然として右の如き比較から兩者が全く一致することを確かめ得たのである。佛陀入寂の記事は前記佛傳涅槃部や涅槃部に當然あるべきであるからそれが有つても何も驚くに及ばぬのはあるが、然し何處にも有り乍ら其小細の事件、その文句の節々が全く一致するものは獨り此の法顯譯の『涅槃經』卷下であつて外にないのであるから、右様斷定を下し得るのである。要するに『遺教經』の形體たる入滅の記事は『涅槃經』の記事と一致するから記事の確實性を證すると同時に少くも『遺教經』の中半以上即ち首尾共に既に早く成立した事を認め得るのである。

然らば『遺教』の自餘の半分即ち『遺教』の内容たる教誨は何處から來たか其成立如何。抑も此教誨は大體「脩習世間功德分」(七誡)と「成就世間大人功德分」(八大人覺)とであるが、此部分に相當するものは遺憾ながら前記佛傳諸經にも涅槃部にも殆んど形跡すらないのである。是等には四聖諦八正道等の徳目の説法はあつたが、七誡八大人覺等は全然無い。依て更に之を藏中に求めた所、『阿含』の中に大體一致する文を見出したのである。尤も八大人覺は『中阿含』八念經、同異譯『阿那律八念經』、『中阿含』七車經等と殆ぼ一致するから古來同系或は同型のものと考えられ最近増永氏も『本年報第三輯』に「八大人覺の原始的研究」を出しその成立並に『遺教經』との關係をも發表されてゐるのに賛意を表し従つて今重説を避ける。但世間功德分即ち七誡の説に就て藏中を涉獵した所『長阿含』

「阿摩書經」中に右と合致の文を見出したので茲に之を報告する。此「阿摩書經」は佛俱薩羅國遊行中佛伽羅婆羅門の第一弟子阿摩書の爲めの説法で、此中に出家人の十戒を説かれ更に比丘の諸行の相を示された所が遺教の七誡の文と一致するものがある。「阿摩書經」と「遺教經」とは廣略の差があるが今文句の極めて相似するもののみを擧げる。

不<sub>レ</sub>畜<sub>二</sub>奴<sub>一</sub>婢<sub>二</sub>象<sub>一</sub>馬<sub>二</sub>牛<sub>一</sub>鷄<sub>二</sub>犬<sub>一</sub>猪<sub>二</sub>羊<sub>一</sub>田<sub>二</sub>宅<sub>一</sub>園<sub>二</sub>觀<sub>一</sub>……………自營<sub>二</sub>生業<sub>一</sub>種<sub>二</sub>殖<sub>一</sub>樹<sub>二</sub>木<sub>一</sub>鬼神所<sub>レ</sub>依。入<sub>二</sub>我法<sub>一</sub>者無<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>是事<sub>一</sub>……………瞻<sub>二</sub>相<sub>一</sub>男女<sub>二</sub>吉<sub>一</sub>凶<sub>二</sub>好<sub>一</sub>醜<sub>二</sub>及<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>畜生<sub>一</sub>以求<sub>二</sub>利養<sub>一</sub>……………令<sub>レ</sub>住<sub>二</sub>種<sub>一</sub>種<sub>二</sub>禱<sub>一</sub>……………爲<sub>レ</sub>人<sub>二</sub>呪<sub>一</sub>病<sub>二</sub>或<sub>レ</sub>誦<sub>二</sub>惡<sub>一</sub>術<sub>二</sub>或<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>善<sub>一</sub>呪<sub>二</sub>或<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>醫<sub>一</sub>方<sub>二</sub>鍼<sub>一</sub>灸<sub>二</sub>藥<sub>一</sub>石<sub>二</sub>療<sub>一</sub>治<sub>二</sub>諸<sub>一</sub>病……………或<sub>レ</sub>呪<sub>二</sub>水<sub>一</sub>火<sub>二</sub>或<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>鬼<sub>一</sub>呪……………或<sub>レ</sub>是<sub>二</sub>安<sub>一</sub>宅<sub>二</sub>符<sub>一</sub>呪……………或<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>手<sub>一</sub>面……………天文<sub>二</sub>書……………瞻<sub>二</sub>相<sub>一</sub>天<sub>二</sub>時……………或<sub>レ</sub>説<sub>二</sub>地<sub>一</sub>動<sub>二</sub>彗<sub>一</sub>星<sub>二</sub>日<sub>一</sub>薄<sub>二</sub>蝕<sub>一</sub>或<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>星<sub>一</sub>蝕<sub>二</sub>或<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>不<sub>一</sub>蝕……………入<sub>二</sub>我法<sub>一</sub>者無<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>是事<sub>一</sub>……………事……………

○ ○  
求<sub>二</sub>爲<sub>一</sub>使<sub>二</sub>命<sub>一</sub>若<sub>二</sub>爲<sub>一</sub>王<sub>二</sub>王<sub>一</sub>大臣<sub>二</sub>婆<sub>一</sub>羅<sub>二</sub>門<sub>一</sub>居士<sub>二</sub>通<sub>一</sub>信<sub>二</sub>使<sub>一</sub>……………入<sub>二</sub>我法<sub>一</sub>者無<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>此事<sub>一</sub>

量<sub>レ</sub>腹<sub>二</sub>而<sub>一</sub>食<sub>二</sub>無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>藏<sub>一</sub>積<sub>二</sub>度<sub>レ</sub>身<sub>二</sub>而<sub>一</sub>衣<sub>二</sub>趣<sub>一</sub>足<sub>二</sub>而<sub>一</sub>已。法<sub>二</sub>服<sub>一</sub>應<sub>二</sub>器<sub>一</sub>常<sub>二</sub>與<sub>レ</sub>身<sub>一</sub>俱……………如<sub>二</sub>餘<sub>一</sub>沙<sub>二</sub>門<sub>一</sub>婆<sub>二</sub>羅<sub>一</sub>門<sub>二</sub>受<sub>一</sub>他<sub>二</sub>信<sub>一</sub>施<sub>二</sub>更<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>餘<sub>一</sub>積<sub>二</sub>衣服<sub>一</sub>飲<sub>二</sub>食<sub>一</sub>無<sub>二</sub>月<sub>一</sub>厭<sub>二</sub>足<sub>一</sub>入<sub>二</sub>我法<sub>一</sub>者無<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>此事<sub>一</sub>

以上は『遺教』の七誡の第一「誡邪業」の文と殆ぼ一致する、但だ順序前後すると説相廣略の差があるのみ、比丘不相應の邪業を列擧せられたのであるから内容さへ一致すれば順序は問無でない。次に『遺教』の第二「誡制根心」の條に當る文として、

但修<sub>二</sub>聖戒<sub>一</sub>無<sub>二</sub>染著心<sub>一</sub>。內懷<sub>二</sub>喜樂<sub>一</sub>。目雖<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>色。而不<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>相。眼不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>色之所<sub>二</sub>拘繫<sub>一</sub>。堅固寂然無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>貪著<sub>一</sub>。亦無<sub>二</sub>憂患<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>漏<sub>二</sub>諸惡<sub>一</sub>。堅<sub>二</sub>持戒品<sub>一</sub>。善<sub>二</sub>護眼根<sub>一</sub>。耳<sub>二</sub>鼻<sub>一</sub>。舌<sub>二</sub>身<sub>一</sub>。意亦復<sub>レ</sub>如是。善<sub>二</sub>御六觸<sub>一</sub>。護持調伏令<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>安穩<sub>一</sub>。獨如<sub>レ</sub>平地駕<sub>二</sub>四馬<sub>一</sub>。車<sub>二</sub>善調御者<sub>一</sub>。執<sub>レ</sub>鞭持<sub>レ</sub>控<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>轡。比丘如是。御<sub>二</sub>六根馬<sub>一</sub>。安穩無<sub>レ</sub>失。彼有<sub>レ</sub>如是聖戒<sub>一</sub>。得<sub>二</sub>聖眼根<sub>一</sub>。

此處には六根を合説し『遺教』には五根と意根とを分説したる相違があるのみで他の文義は一致する。殊に前者の調馬の喩が後者の牧牛の喩となつて居る所は牛馬の差こそあれ同意義の喩であるのは興味がある加之後者『遺教』に調馬の喩もあるから此合致點が一層面白いのである。次に第三「誠多求」相當の文は

食<sub>二</sub>知止足<sub>一</sub>亦不<sub>二</sub>貪味<sub>一</sub>。趣<sub>二</sub>以養身<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>苦患<sub>一</sub>。而不<sub>二</sub>貢高<sub>一</sub>調<sub>二</sub>和其身<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>故若滅新苦不<sub>レ</sub>生。有力無事令<sub>レ</sub>身安樂。猶如<sub>レ</sub>有人以<sub>レ</sub>藥塗<sub>レ</sub>瘡趣<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>瘡差。不<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>飾好<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>自高<sub>一</sub>。摩納。比丘如是。食<sub>二</sub>足<sub>一</sub>支<sub>二</sub>身不<sub>レ</sub>懷<sub>二</sub>慢恣<sub>一</sub>。又如<sub>レ</sub>膏車欲使<sub>二</sub>通利<sub>一</sub>以用運載有<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>至到<sub>一</sub>。

であるが、『遺教』には服藥、蜂花、牛力の三喩が用ゐられてゐるのに對し「阿摩晝經」には塗藥と膏車との二喩が擧げてある。兩經喩意必ずしも同じからざるもその用法甚だ暗合するものがあつて更に興味を引くものがある。

第四「誠睡眠」(懈怠)相當の文としては

食<sub>二</sub>知止足<sub>一</sub>。初夜後夜精進覺悟。又於<sub>二</sub>晝日<sub>一</sub>若行若坐。常念<sub>二</sub>一心除<sub>二</sub>衆陰蓋<sub>一</sub>……………乃至中夜偃右脅<sub>一</sub>而臥。念<sub>二</sub>時起<sub>一</sub>繫想在<sub>レ</sub>明心無<sub>二</sub>錯亂<sub>一</sub>。至<sub>二</sub>後夜<sub>一</sub>便起思惟……………如是比丘內身身觀精勤不懈……………云何一心……………左右便利睡眠覺悟坐立語默。於<sub>二</sub>一切時<sub>一</sub>常念<sub>二</sub>一心不<sub>レ</sub>失<sub>二</sub>威儀<sub>一</sub>。

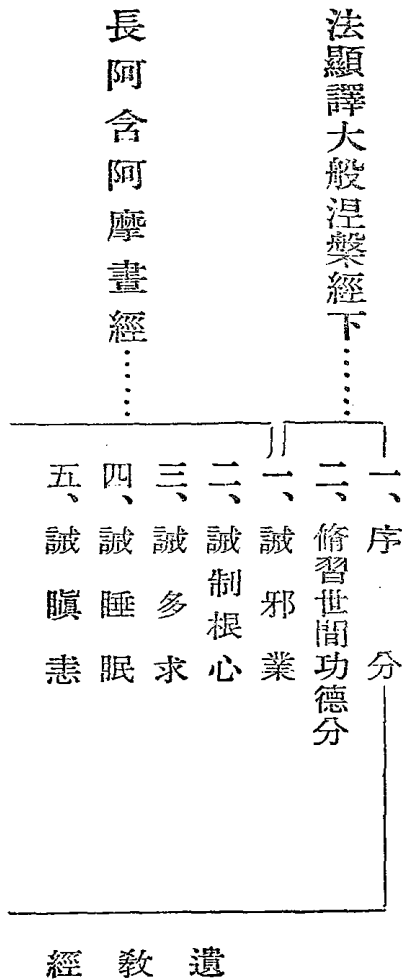
第五「誠瞋恚」相當文として

除<sub>二</sub>去慳貪心<sub>一</sub>不<sub>二</sub>與俱滅<sub>一</sub>隨恨心<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>怨結<sub>一</sub>心住<sub>二</sub>清淨<sub>一</sub>常懷<sub>二</sub>慈愍<sub>一</sub>除<sub>二</sub>去睡眠<sub>一</sub>繫想在<sub>レ</sub>明。

がある。此等二文は一連の文で此の如く分別することは出来ぬのだが其順序と内容は大に該當する。但し『遺教』には頗る澤山の譬喩を用ゐてゐるから文面は甚だ異なるやうだがつゞめて見れば内容は大差無いのである。最後に第六「誠貢高」と第七「誠諂曲」とに相當文が無いのは脚が物足らぬが、此二文は『遺教』でも極く略説であるし、貢高の誠は少分ながら前掲「誠多求」相當文中に出てゐるから茲にその説のあつたことは確かである、但だ諂曲の誠は譏語等の誠と共に佛陀通途の誠であるから茲に無くとも必ずしも重大問題ではない。解釋の仕方に依つては同義の箇處が澤山あるとも見られる。

斯く「阿摩晝經」所説ノ出家行を丹念に比較すると『遺教經』「脩習世間功德分」の七誠の文其儘であると云ふことが出来る。兩經亦成立上甚だ密接な關係があつたやうに思はれる。

上來の比較に依つて『遺教經』の組織内容は次の如き關係が想像される。





中阿含八念經。七車經。……三、成就出世間大人功德分

四、顯示畢竟甚深功德分

五、顯示入證決定分

法顯譯大般涅槃經……

六、分別未入上上證爲斷疑分

七、離種々自性清淨無我分

分 七

此表に依ると第四「顯示畢竟甚深功德分」の少部分のみ此上揚三經に相當文が無いだけでは他は殆んど全部あり、加ふるに其相當箇處が劃然ときまり良く對當し前後首尾の記事文が『大般涅槃經』に當り中間說法内容の部分が『阿含』の二經に該當するので、茲に『遺教經』成立工作の經過狀況が暗示されて居るかの如く思はれる。

扱て此以外に確實な史料が無い限り『遺教經』成立に斷定的な結論を下し得ないのであるが然し古來の先輩諸氏の研究と照合して若干の推定が出来ないでもない。一體『遺教經』と完く吻合する『佛所行讚』『大涅槃品』は馬鳴は何處から材料を取つて來たか、先にも述べたやうに多くの佛傳諸經には佛陀最後の涅槃篇を缺いて居るし、涅槃部諸經には涅槃が中心内容であるから勿論涅槃の記事及最後の說法が記載されて居るが『遺教經』即ち「大涅槃品」の如き内容は全く無い。思ふに「大涅槃品」の取材は必ずや前記法顯譯『大般涅槃經』、「阿摩晝經」「八念經」「七車經」等で、是等を補綴して『讚』の「涅槃品」を作したのではなからうか、『讚』の大部分の材料は幾らでも澤山あつたが「涅槃品」の材料だけは此外にないから、斯く觀なければ馬鳴撰述の所依所傳を失ふからである。馬鳴は前記取材に

多くの巧名な譬喩と美辭とを加へて表現せることは『所行讚』の他の部分と異りが無い。而して其『大涅槃品』の部分が後一經として獨立したのが『遺教經』であらう、前記材料諸經には『遺教』の特色とも云ふべき多くの譬喩を缺くが故に、是等諸經が直に補綴されて『遺經』となつたとは見られない、是等諸經が馬鳴の手を經『所行讚』を通して『遺教經』の成立となつたと解したのである。兎も角斯かる傳持成立經過が一應認められるならば『遺教』の内容が恐らく佛説の傳承であることは疑ふには及ばぬのであるが尙未解決の儘殘された問題はこれが涅槃の夕の最後の説法であるか否かと云ふことである。然しこれは甚だ困難な問題で恐らく永久の問題であらう。